Life

December 17 , 1971

Special Double Issue

—Children—

雑誌ライフの一九七一年十二月十七日号は、子どもについての特集号である。子どもの世界をカメラによってとらえたり、子どもの書物や創造性について書いたり、幼児の学習や情緒、身体発達についてまとめたり、世代の交代や養子の問題にもふれている。

その中のブックリビューで、レインズ夫人は特色ある子どもの本をいくつか紹介している。以下はその部分からの抜萃である。

「六〇年代の半ばから、幼児むけの書物の文も絵も共に、社会秩序のぐらつきの徴候を、明らかに表わし始めた。もはや、単に内容をアルファベットの文字であらわしたり、動物の名や数などを扱うのではなく、絵本の著者やイラストレイターは変わった。この秋に行なわれたエール大学での『子どもの文学に関する会議』でも—現実と幼い子ども—とか、—子どもの文字における激しさと死—等というテーマが深刻にとりあげられた。驚くことに、書物それ自体が、ただ悲しげで傷ましいのがあるのだ。

たとえば、『Changes, Changes』という本の中で、英国人作家兼イラストレイターのパットハッチンズ（Pat Hutchins）は独特な知恵とスタイルの作品をあらわした。絵を見ただけでも、いかに一組の頑強な木製の人形が、二、三ダースの融通のきく積木を使って、陽気に火事や洪水や種々の危険を乗り越えるかというのがわかる。フォスター（E. M. Forster）がおとなにとってとうといことばとして『つながり』(Only Connect)といったのに対して、同じようにハッチンズは今日の幼児に強力なアドヴァイスとして『適応力』(Only Adapt)といっているのであ

る。

こっけいなのは、四歳から七歳の幼児むけのアメリカの反成功物語である『The Pancake King』(P. L. Fargeの文Schwastによるさし絵)である。

小さな主人公のヘンリー・エッジウッドはパンケーキづくりの底抜け騒ぎをひきおこす。しかし、荒々しい企業家のアーサー・ジィンカーを知るとヘンリーのぜい沢さんまいは人生の喜びを失った慰めにはならない。とうとうヘンリーは名声に背をむけ、七歳という年齢にして、成功もまた腐敗であり、完全なる成功は、完全なる腐敗であることに気づくのである。

『Shrewbettinas Birthday』という本では、著者のジョン・S・グッダル(John S. Goodall)は言葉なくして、のどかな英国の田舎でさえも、もはや安全ではないといっている。半ページの独創的なさし絵は動きを表わしなかなかよい。が最初の現代的な涼味が終わると、物語は従来の沈滞した中で居心地よく内容をすすめる。

『Amos and Boris』という本の中でウィリアム・スタイグ(Willian Steig)は確かに子どもの本の第一級の創造者として、晩成の名声を得た。この新しい書物の魅力は、明確な文章の深さと同時に、明瞭な水彩画の微妙な芸術的技にある。船乗りねずみのアモスは、自己実現の絶頂から、現在の失意のどん底に落ちるのだが、適度の甘辛い楽観主義でもって、著者は子どもたちに人生のものすごい恐ろしい予期できない出来事と、それに対する小さな者の勇敢な反発力を語っている。

一九七一年の全く荒廃した絵本は『Yellow, Yellow』である。フランク・(Frank Asch)が文を書き、マーク・アラン・スタマティ(Mark Alan Stamaty)が絵を描いている。この本はあるレベルでは、小さな少年が、工事現場の労働者の黄色いヘルメットをみつけ、それを大切にし、最後に返すというあかるい冒険談でもある。しかしながらスタマティーのにがいペン書きの絵は、暗い社会の一面を加えている。近年に隠とんしたドイツキリスト教信者の世界観のように、とりとめもない消費者は、確かに自からへこんだビールのあきかんの下に埋められている。そこでは、ミニスカートをはいたおばあさんが単車のペダルを踏みながら永遠の若さを宣言している。そしてこのしゃれた都会の悪夢の中で、小さな黄色い帽子をかぶった主人公は、澄んだ目をして断固として、彼の心臓の鼓動にあわせて町を歩くのである。われわれの唯一の望みは、このようにひねり曲がった夢のない文学の中で育つ現実の子どもたちが、それらに染まらず、主人公のように歩んで欲しいということである。

(十文字学園女子短期大学)